

# 現代文学における「姨捨」の系譜(四)

——二つの「姨捨山」——

工藤 茂

一

姨捨ということばは、棄老の概念に含まれる。この棄老について増田光吉が「いやな言葉である。おば捨て山の伝説を思いおこさせる。」と書いたのは、老人と家族の問題がクロウズ・アップされてきた昭和五十四年三月のことであった(二日付朝日新聞「老人と家族」<sup>(12)</sup>)。同年同月十四日、同じ朝日新聞は、「現代のうば捨て」に猶子、と見出しをつけて、昭和五十二年十月、埼玉県蕨市で死にたいという老母を息子夫婦が相談してバイクに乗せて荒川まで連れていき入水させた事件の判決が、執行猶子付の刑になったことを報じていた。また同紙の同年同月十六日付の社会面には、長崎の大村市立病院長が「病院は医師、看護婦つきのうば捨て山ではない」と

言って、治療方法や効果のない寝たきり老人や植物人間のうな入院患者十五人に退院を勧め、それが問題化しているというニュースが、掲載されていた。これらはいずれも、老人の疎外問題を取り扱ったものであるが、そこに共通して使われていたのが「姨捨」あるいは「姥捨」ということばであった。このことばの内容は、昭和五十六年三月、堀秀彦が「銀の座席」に書いた次の文章に要約されている。

分かりきったことだが、昔と今とでは、老人に対する考え方はずいぶんとちがっている。昔は貧寒な村落などでは、役に立たなくなつた老人は半ば公然と棄てられた。赤ん坊が間引かれたように。だがその一方、生活にゆとりがあれば、年寄りには尊敬された。尊敬されたのは第一に、七十を越した老人たちが希少であつたため。第二に

老人たちの経験と知識が貴重であつたためだろう。

昔、平均寿命が短かく、人生五十年と言われた時代、「姨捨」はむしろ文芸の上だけに命を保つてきた。今、核家族化が進み、平均寿命が七十歳を超えて、「姨捨」「姥捨」「親棄」の問題が、にわかにはクロース・アップされてきたのは、人々が中流意識を持ち、その生活状態が中産階級化したからではなく、むしろ逆に各家族が貧困化して、速度だけが增大していく生活に、溺れかけているからであろう。現代の「姨捨」は、ただ単に人の孝の心の欠除のみから生じているものではない。他の動物は子の面倒は見ることが、親の面倒は見ない。親の面倒を見るのは人間だけである。だが、多様な問題がそこに複雑に介在して、孝の心の切実さに泣きながら、親を棄てる。実はこれが古来から現代に至る「姨捨」の内実であつた。

親棄山とはけしからぬ話、聴くも耳の穢れと思う人もあろうが、是はそういう驚くような話題を出して、先ず聴く者の注意を引き寄せようとする手だてであつた。実際には人に孝行を勤める話なのである。人によつては又棄老国ともいうが、この名称は外国から来て居る。昔々、いつの頃とも知れない遠い昔、そうして又何処に在るか、もはつきりしない或一つの国に、親が六十歳になると、山へ棄て、来なければならぬという、飛んでも無い習わしがあつた。それが一人のよい子供、もしくは心のやさしい者の行いによつて、もう永久にそんな事をする者が

無いようになったという話、その話し方が又變つて居て面白いのであつた。

柳田国男は「姨捨」説話の特色をこのように「親棄山」に書いている。従つてこの説話は児童のための文学にも登場してくるのである。

ここに二つの「姨捨山」がある。一つは『日本お伽噺』の「姨捨山」、もう一つは『日本お伽集』の「姨捨山」である。

井上靖はかつて「姨捨」という作品に、絵本『おぼすて山』のことを書いていた。それには「最初の一頁の挿絵だけが着色され、他の頁にはそれぞれ凸版の挿絵がついていて、子供には幾らか難しすぎると思われれる文体で、姨捨山の説話が書かれてあつた」という。氏はそれに続けてさらにその絵本のあらすじを書きとめて<sup>(3)</sup>いる。だがそれによると、その絵本は先に掲げた二つの「姨捨山」とは別のものだったと考えられる。しかしいずれにしろ、このことは「姨捨山」の伝説が、子供向けの絵本や文学に多く登場したことを物語っている。事実、私もそのような絵本を読んだ遠い記憶を持つてゐるのである。しかしここでは、先の二つの「姨捨山」に限つて、検討をしてみることにした。

## 一一

『日本お伽噺』は大江小波の編で、明治二十九年十月から

明治三十二年一月まで、全部で二十四冊、博文館から出版された。大江小波とは巖谷小波のことである。彼は先に『日本昔噺』全二十四冊を完成させ、引続き『日本お伽噺』を編述したのであつた。その刊行の意図と特色は、第壹編に掲げられている「一筆啓上仕候」に詳しいので、少々長くなるがそれを次に引用してみよう。

先以て少年諸君、愈々御機嫌宜しく御勉強遊ばされ、大慶至極に奉存候。次に小波事お蔭を以て、無事消光罷在候間、憚ながら御安心下され度候。小波事

一、先に「日本昔噺」の編述を思ひ立ち候てより、年を経ること二年、編を重ぬること二ダアス、実に廿四種の昔噺を、覚束無くも書き綴り候処、幸に諸君の御喝采を得、望外の好結果を見るに至り候段、喜悅之に過ず、難有御礼申上候。

一、然る処、少年諸君の御伽として、御玩読を願ひ度物語は、中々彼位にては尽し難く、我邦太古よりの歴史の中にも、面白きお噺沢山御坐候間、此を成べく平易に、成る可く面白く書き綴り、今一度諸君の御喝采を得度と存じ、更に稿を起し候が、即此の「日本お伽噺」に御坐候。

一、「日本お伽噺」は、右申上候通り、首に日本古来の歴史の中より、その材料を求め候には相違無之候へども、強ち實際の事にのみ偏せず、荒唐無稽の事、乃至

は歴史家の疑問として、虚実何れとも定め兼ねる事にて、読んで面白く、聞きて慰樂に相成候事は、遠慮に及ばず書き綴り候。要するに、日本お伽噺はお伽噺にて、決して歴史噺には御坐なく候。

一、文章は従来「日本昔噺」にて用ひ候如く、口で御噺致し候通り、即ち言文一致を以て書き綴り候へども、時として少々至難しき言葉をも、余儀なく使はねばならぬ場合少からず、これには小波も毎度閉口仕り候依て左る言葉の出候節は、阿父様なり阿母様なり、又阿兄様乎阿姉様に、御遠慮なく御尋ね遊ばされ度左すれば又幾分か御裨益にも相成申す可くと存じ候。

一、附録として巻尾に附し候は、皆小波自作のお伽噺にて、「少年世界」に連載致し候ものに候へども、猶御読み洩しの諸君も御坐候べくと存じ、態と附録に致し候。此種のお伽噺に就ては、多年研究致し居り、今後も一層勉強致し度き存念に御坐候間、此亦本文同様御愛読の程願ひ奉り候。

一、さて又小波が、彼の「少年文学」以来、此昔噺お伽噺に従事致し候に就ては、一面には文壇の諸先輩就中坪内逍遙、森鷗外、依田学海、饜庭篁村、幸堂得知の諸君より、御賛成と御注意とを受、又一面には、辱知の幼年少女諸君より、御評判と御助言とを得て、大いに發明致し候間、今故らに此処に記して、感謝の意を

表し申候。

先は右申上度恐惶謹言。

明治廿九年十月吉日

大日本少年諸君（原文総ルビ）

大江小波拜

ここに掲げられた六項目をまとめてみると、「日本昔噺」の出版が好評であつたこと、その他にも少年たちに味わせた物語が多く、わが国の歴史から面白いものを選んで平易に書き綴つたのが『日本お伽噺』であること（以上その出版の意図）、これはしかし、虚実取り混ぜた「お伽噺」であつて決して「歴史噺」ではないこと（その内容の特色）、文章は『日本昔噺』に用いた言文一致体によつたこと（文体の特色）、附録として『少年世界』に連載した小波自身の作品を巻尾に付したこと（構成の特色）、および、坪内逍遙、森鷗外などの賛成と注意への感謝、並びに読者への感謝とならう。

ここでお伽噺というのは、お伽の時の、またはお伽の人の話というのではない。神話、昔話、伝説、歴史譚を包括する少年に相応しい話の意味であつた。ちなみに『日本お伽噺』二十四編の、附録を除いた内容を掲げてみよう。

(一)八咫鳥、(二)田村將軍、(三)玉取・羽衣、(四)源三位、(五)八幡太郎、(六)武藏坊、(七)一休和尚、(八)東照宮、(九)姨捨山・養老の滝、(十)川中島、(十一)玄武門、(十二)白虎隊、(十三)鎮西八郎、(十四)最明寺、(十五)朝比奈、(十六)桜井駅、(十七)草薙劍、(十八)日吉丸、(十九)文覚

上人、(二十)和唐内、(二十一)高千穂、(二十二)鬼童丸、(二十三)熊本城、(二十四)宇治川。

右の編名によつて、これらの物語の内容のおおよその察しはつく。ただし、「玄武門」「高千穂」は日清戦争に、「熊本城」は西南戦争にそれぞれ取材した、いわゆる現代物であつた。これらはただ単に、少年たち読者の楽しみのために出版されたばかりではなく、その背後には当時のナショナルリズムと、大日本を担う少年たちを訓育しようとする意図とが感じ取れる。そしてこれらの第九編に、「姨捨山」は「養老の滝」と共に収められていたのである。作者（小波）はその序を「此度は姨捨と養老、何方も親孝行のお話で御在ます。」と書き出す。つまり作者はこれを、(孝)の徳を少年たちに示すお伽噺として編述したのであつた。続けて作者は「姨捨の方のお話は、大和物語とも、又姨捨山縁起とも、大分違つて居りますが、是は別に信州の人から聞いて、其地方での口碑に、多小の創意を加へたもので、所謂信州の人とは、則ち館友宮沢春文君です。」と書いている。ここに言う「多小の創意」とはどのような「創意」なのか、推察するのは困難であるが、ここに収められている「姨捨山」の話は、その後半部分が他の「姨捨山」のそれとは大きく異なっている。作者（小波）が「姨捨山」のお話は、大和物語とも、又姨捨山縁起とも、大分違つて居ります」と断っているから、おそらく宮沢春文の語つた昔話そのものが、その後半を他の姨捨山と内容を異にしたも

のであったのだらう。

さてこの「姨捨山」は、次のような話である。

むかし信濃の国に奇麗好の殿様がいた。人間も年を取ると汚くなる。それをきらって老人は殺すように命令した。

今の姨捨山がそう呼ばれる前に、その山の近くに一人の親孝行の百姓がいた。彼はどうしても年老いた母を殺すことができない。そこで、ある十五夜の晩に母を負って山へ行った。途すがら背の母は木の枝をピシ／＼折って路に捨てる。頂上に着いた時百姓は、自分が母を殺すに忍びず、この山に母を捨てて来たことを話す。母は素直に聞き分けた。帰路、母の折った木の枝を見ながら行くと、迷わず家に着いた。百姓はその時はじめて枝を折った母の心を察し、自分の不孝を後悔して山に引き返し、母を連れ帰った。そのことが殿様の耳にはいると大変である。そこで百姓は母を人の知れない穴蔵に入れ、三度の膳を運んで孝行にはげんだ。

それからしばらくして、殿様は国の百姓の知恵を試そうとお布令を出した。それは、灰でこしらえた縄と本末の無い材木を献上せよというものであった。百姓たちは相談したけれどもいい知恵が出ない。孝行の百姓は家に帰って母に相談した。すると、母は「ナニ、それは訳も無い事だ。最初に普通の縄を拵へて、それをそつと火で焼けば、みんな灰に成ってしまふけれど、縄の形は其儘残って居るから、灰で拵へた縄も同じ事ぢやないか。又本末の無い材木を拵へるには、何の

材木でも構はない、まづ末の方を十分に叩いて、それを暫らく水に漬けて置くのだ。さうすると其処が膨やけて、本と同じ太さに成り、まるで水に浮かしても、何方へも傾がない様に成るから、つまり本末の無い材木に成る。」と教えてくれた。百姓は教えられたとおりに二つの物を作って献上した。すると殿様は感心してその百姓を呼び出した。正直な百姓は殿様の前で一部始終を申し上げた。殿様は反省して、前に出していた命令を廃止した。百姓は前にもまして母親に孝行を尽した。

以上がこの「姨捨山」の前半である。姨捨（親棄）説話はその内容から、親棄奮型の話、難題型の話、鬭争型の話、枝折型の話の四種に分類できる。この分類に従うと右の話は枝折型と難題型が融合した型を取っている。日本全国に分布している親捨て山の昔話は、ほぼこの「姨捨山」と同じ枝折型と難題型の融合した型で、『日本昔話大成』の五二三A親棄山に分類されている。従ってこの「姨捨山」の前半は、日本に広く分布している親捨て山の昔話と、ほぼ同種のものといふことができる。ただこの「姨捨山」の二つの難題は、他の昔話では多様で、これと同じ内容の難題二つというのは、『日本昔話大成』による限り信州（長野）には見られず、その隣の甲州（山梨）で、信州の話として語られていた（富士北麓昔話集）。

問題は、この「姨捨山」の後半の部分である。後半は親孝行

だった百姓の母親が亡くなり、その悲しみに百姓は毎晩泣いてばかりいる。そんなある十五夜の晩、一人の奇麗な若い女が百姓に声を掛けた。百姓が驚いていると、女は、お月様がお前さんの孝行に感心なすって、妾をお前さんのお嫁に寄越したのだという。女の慰めによって母を亡くした悲しみから立ち直った百姓は、その女と夫婦になつて幸福に暮らしてゐた。

ところがここに隣国との戦争が持ち上がった。百姓たちは殿様のお布令によつて、二三日のうちに大きな城を作らなければならなくなった。けれども、そんなことはとても不可能である。困っていると、そのことを聞いた親孝行だった百姓の嫁は、自分の懐中から小さな箱を取り出し、お呪咀を云いながらその蓋を開けた。すると中から大工や左官が何万人と出て、大きなお城をまたたくまに作り上げて、また箱の中にはいつてしまった。この城にこもつて戦つた殿様は決して負けることなく、ついに大勝利をおさめることができた。

百姓夫婦はそのため沢山の御褒美を頂戴して、日本一の長者になった。

母を亡くした悲しみに仕事も手につかない百姓の姿を現代の眼で見ると、いつまでも親離れできない問題児ではない。だが、これを裏返せば、確かに孝の道の深さにならう。そういう意味でこの百姓は、「孝」の手本であつた。だから天女がお月様に遣わされて、男の嫁として天降り、一篇の致富譚を

形成したのである。

一見天人女房のモチーフに見えながら、これはしかし天人女房ではない。天人女房には、天の羽衣を隠す男の狡知と意地悪があつたのだから。それよりはむしろ、そのテーマ（天降りした天女による致富）から見て、竹取物語に近い内容と言つた方がいいかもしれない。

ところでこの後半の物語の中に、戦争のために殿様から二三日で大きな城を作れという難題が出され、男の女房が懐中から箱を取り出してそれを解決するという場面があつた。この、異郷の女性が人間の妻となり、呪宝によつて難題を解決して夫に富をもたらすというモチーフは、実は龍宮女房のそれであつた。つまりこれは、もつとも龍宮女房に近い物語だったのである。そしてこの龍宮女房のモチーフが、親捨て山の昔話に混在していたところに、『日本お伽噺』第九編所収のこの「姨捨山」の特徴があつたのである。

## 二二

もう一つの「姨捨山」は『日本お伽集1』所収のそれである。『日本お伽集』は全二巻東洋文庫として平凡社から刊行された。1は昭和四十七年十一月十日、2は昭和四十八年五月二十二日に刊行されている。その巻頭に付されている「凡例」には、

本書は、森林太郎、松村武雄、鈴木三重吉、馬淵冷佑同撰、標準於伽文庫『日本神話』(上巻、下巻)、『日本伝説』(上巻、下巻)、『日本童話』(上巻、下巻)——初版大正九年、同十年、培風館発行——の復刻である。

と印刷されている。つまり『日本お伽集』は、大正九年、十年に刊行された『標準於伽文庫』の復刻なのである。したがってここではその本文は『日本お伽集』に依拠しながら、それを扱う意識としては『標準於伽文庫』の時点まで溯って、考えていつてみたい。

この集と巖谷小波の『日本お伽噺』との大きな相違は、そのお伽噺の所属するジャンルに対する編述者の意識の有無にある。後者にはその意識が見られないのに、前者にはそれが明確に存在する。たとえば小波が『日本昔噺』として出した二十四冊の内容と、『日本お伽噺』二十四冊の内容を検討してみれば、それは明らかである。ここには昔噺とお伽噺との明確なジャンル意識は勿論のこと、昔話、神話、伝説、当代物のジャンルの区別もなく、それらがただ任意の順序で編述されているにすぎない。それに対して『標準於伽文庫』の復刻『日本お伽集』は、神話、伝説、童話という明確なジャンル意識によって編纂されている。たとえば「付録(原版巻末「解説」)」の次のような文章に、それは顕著に見えている。

私共はこの巻の解説を作るに臨んで、先ず読者に私共の態度を告げて置いて、万一の誤解に備えなくてはなら

ぬかと思ひます。私共はこの場合に於て、神話と歴史との限界線を劃する方面の研究に手を出そうとしたわけはありません。歴史上の人物が神話中にはいつている時に、その神話の全体をやはり神話として取り扱うのが、即ち説話学者の態度であります。私共はこの態度を以て比較説話学上の分類等に從事しました。(後略。原文総ルビ。)

そしてこの分類意識の具体化が、この集の次のような編纂に示されていた。

#### 〈日本神話〉

世界の初め、黄泉の国、天の岩戸、八岐大蛇、白兔、賭、国引、雉のお使い、国譲り、高千穂の峰、人の命、海幸と山幸、橿原宮。

#### 〈日本伝説〉

浦島太郎、一寸法師、姨捨山、羽衣、金太郎、松山鏡、玉取り、山椒太夫、田原藤太、物臭太郎、羅生門、牛若。

#### 〈日本童話〉

桃太郎、花サカジジイ、サルカニ、舌切雀、カチカチ山、コブ取り、鼠ノヨメ入り、海月ノオ使い、猫ノ草紙、文福茶釜。

しかもこれらの「説話」の一つ一つに、先に引用した学問的ともいえる「解説」が付されていたのである。つまりこれが『標準於伽文庫』の復刻『日本お伽集』の特色であった。

さて、本稿の主題である「姨捨山」は、この集では伝説のジャンルに分類されている。一に引用した柳田国男の「親棄山」の本文のように、「昔々、いつの頃とも知れない遠い昔、そうして又何処に在るかもはっきりしない或一つの国に：」と語り出されると、これは昔話となる。ところが、国が決まっていたり、その話の記念物となる山が実在したりすると、これは伝説となる。もつともこの集の編者は「姨捨山の物語は一種の棄老伝説と見るべきであります。日本には古くからさまざまの形式の棄老伝説が存しています。」という観点から、これを伝説のジャンルに入れたようである。

ところでこの集の「付録」の「解説」(筆者不明)では、先に私が四種に分類した姨捨を、三種に分類している。即ち、

第一 原谷の物語……(親棄畚型)

第二 蟻通明神の物語(難題型)

第三 所謂姨捨山の伝説(鬮争型)

そして、右のうち

(1) 第一種と第二種とは印度に発生したものと

(2) 第三種は第一種と第二種に關係なく、日本に発生したものと

の

とする。(括弧内の注記は小生)これを四種に再分類したのが

柳田国男の「親棄山」であった。即ち

(一) 親棄畚(原谷)の話

(二) 蟻通明神の縁起(枕草子)系の話

(三) 信州更級の姨捨山(大和物語)系の話  
(四) 枝折型の話

柳田はこのうち(一)を中国起源、(二)を印度起源(インドに出て、中国を経由して日本に渡来)、(三)(四)を日本起源とした。

「姨捨」説話の内容から考えて、後者の説が前者の説より一歩進んだ説と考えることができる。

説話の起源としては、ほぼ以上の説が現時点において妥当であろうと考えられるが、社会制度としてはどうであろうか。社会学者の見田宗介が「マドラスの白い敷道」に書いていたところによると、インド人は人生を次の四期に分けて考えているという。

第一 修業にはげむ「学生期」

第二 職業と家庭をもつて社会生活を営む「家住期」

第三 仕事と家庭を捨てて森に住む「林住期」

第四 一切の執着を捨てて杖と鉢と水がめのみを手に乞食

として放浪する「遊行期」

なお、遊行期の老人は「聖者」として尊敬を受けるといふ。

見田はさらにあるインド人から聞いた話として、男は年老いると家庭から出ていくことを期待されること、女も原則的には同じであること、ただし女は家族に執着が大きいので、家に残るけれども正式の食卓にはつかず、暗い一隅につつましく坐っていること、を書き留めていた。これは出家の思想と密接に関連したものであろうが、同時に社会制度、正しくは



社会慣習としての棄老の存在を予測させる報告でもあった。そういった意味において、棄老説話の社会的根源は、インドにたどることが可能なように思われる。

さてここで、『日本お伽集』の「姨捨山」にたちかえることにしよう。この話は四章から構成されている。その要点を左に挙げると、

一、むかし信濃の国に、老人のきらいな殿様がいた。殿様は命令を出して、七十以上の年寄りも島流しにした。

同じ国の更科というところに、一人の百姓が七十になる母とくらししていた。百姓は母が島流しにされることを心配し、母を山に捨てて決心をする。十五夜の晩、彼は山頂でお月見をしようと母を誘って山に登った。道すがら百姓の背負った母は、ぼき／＼と木の枝を折っては道に捨てていく。山頂についた時、百姓はすべてをうち明けた。母はとつくに承知していて、木の枝の落ちている道をたどって帰るように言う。家に帰った百姓は、どうしても母を忘れることができなくて山に引き返し、母を連れて帰った。そして殿様の家来に見つからないように、床下に穴ぐらをこしらえ、そこに母を隠して毎日三度のごはんを運んでいた。

二、隣国から難題の使者が来る。灰の縄を作ることができなければ信濃の国を攻めるといふ。それを聞いて百姓は母に相談する。母は縄に塩をよくつけて焼き、灰の縄を作った。百姓はその縄を殿様に差し上げた。殿様はびっくりして百姓

にたくさんのお金を与え、灰の縄を隣国に送った。

三、しばらくすると、また隣国から難題がきた。玉にあけられた曲りくねった小さな穴に、絹糸を通せという難題であった。百姓はまた母に相談して御殿に出かけた。そして一匹の蟻と蜂蜜を殿様から頂戴し、蟻には絹糸を結びつけてこちらの穴から入れ、向こうの穴には蜂蜜を塗った。蟻は蜜のにおいを求めて反対側の穴にたどりつき、絹糸はみごとに曲りくねった穴を貫いた。殿様は感心して百姓にたくさんのお金を与え、絹糸の通った玉を隣国に返した。隣国の殿様は信濃の国には知恵者がいて攻めることができなと言った。

四、しかししばらくすると、隣りの国の殿様は、また信濃の国の殿様に難題を寄せた。今度の難題は、ひとりで音のする太鼓をこしらえてもらいたい、というものであった。それを聞くと百姓はまた母に相談した。母は、太鼓の皮をはる前に、たくさんのかなぶんを中に入れておけばよい、と教えてくれた。百姓はそのようにして太鼓を作り、殿様に差し上げた。殿様は百姓の知恵に感心して、のぞみのものをとらせようと云った。百姓はそこで初めて老母のことをうちあけて、許しを乞うた。理由を聞いた殿様は百姓の罪を許し、老人の島流しをも取り止めた。

隣国の殿様も、今度こそはと思つた不思議な太鼓ができてきたので、とうとう信濃の国を攻めることを止めた。

以上のように整理してみると、この「姨捨山」も細部には

いろいろな相違がありながらも、大筋においては二で取り上げた「姨捨山」の前半の部分とほぼ同じであることが分かる。つまり姨捨の枝折型と難題型の話が融合した、一般に流布している「親捨て山」の昔話と同型のものであったのである。ただ冒頭の部分が一般には殿様や国主の命令で山に捨てることになっているのに、この「姨捨山」では島流しにすることになっている。実はこの島流しと同趣のものは、今昔物語巻第五「七十余人流遣他国語第三二」に天竺の話として載っている。今昔物語のこの話は典型的な難題型の話で、インド起源と目されるものである。この話に、枝折型の日本の在来種が割り込んだ恰好になったのが、『日本お伽集』の「姨捨山」の物語であった。そこに、島流しを嫌って老母を山に捨てて行くという矛盾も生じたのである。

なお、二で取り扱った「姨捨山」も、その冒頭の部分は一般のそれと違い、殿様の命令によって老人が殺されることになっている。親孝行の百姓はそのため、母を殺すよりはと、山に捨てて行くのである。したがってここにも矛盾はある。ところが、清少納言が枕草子に書き付けた蟻通明神の縁起にも、実は「昔おはしましける帝の、ただわかき人をのみおぼしめして、四十になりぬるをば、うしなはせ給ひければ……」とあって、やはり四十歳を過ぎた者はこれを殺した、と書かれていたのである。枕草子の蟻通明神の縁起は、その内容が先に引用した今昔物語巻第五の天竺の棄老説話と同じ、典型

的な難題型である。したがってこれも外来種の棄老説話と考えてよからう。それゆえ、二で扱った「姨捨山」もまた、ここで扱った「姨捨山」同様、外来種の棄老説話に、在来種の枝折型の説話が結合して誕生した「姨捨山」であった、と考えることができる。そしてそのようなところに、先に指摘したような矛盾も生じたのであった。

#### 四

『日本お伽噺』と『日本お伽集』の二つの「姨捨山」を検討してきて、そこに在来種と外来種の「姨捨」の混在を見た。日本文化の本質を、その価値とは関係なく雑種文化と見抜いた加藤周一の視点を借用すれば、この二者の「姨捨山」の本質も、まさに雑種文化の特徴を備えた説話であった。同時にそこには成長する説話の姿があった。語り継がれていくうちに、枝折型の話に、興味を引かずにはおかない難題型のそれが合流し、さらにそれに竜宮女房の説話が付け加えられていく。このように成長してきた姿が、両者の「姨捨山」だったのである。

#### 〈注〉

(1) 『朝日新聞』(昭和五六年三月六日朝刊)

(2) 柳田国男『母の手毬歌』(昭和二四年一二月八日・芝書

(3) 「姨捨」(『井上靖小説全集11』昭和四九年一月二〇日・新潮社)に書かれている姨捨山の説話は、次のとおりである。

「昔信濃の国に老人嫌いな国主があつて、国中に布告して、老人が七十歳になると尽くこれを山に棄てさせた。ある月明の夜、一人の百姓の若者が母を背負つて山に登つて行つた。母が七十歳になつたので棄てなければならなかつたのである。しかし、若者はどうしても母親を棄てるに忍びず、再び家に連れ戻り、人眼に付かないように床下に穴を掘つて、そこに匿まつた。この頃国主の許に隣国から使者が来て難題を持ちかけた。三つの問題を示し、これを解かなければ国を攻め亡ぼすというのである。その三つの問題というのは、灰で縄を縛うこと、九曲の玉に糸を通すこと、自然に太鼓を鳴らすこととこの問題である。国主は困つて国中に触れを出してこの難題を解く智者を求めた。若者は床下に匿まつている母親にそれを話すと、母親は即座にそれを解く方法を教えてくれた。若者はすぐ国主のもとに申し出て、ために国の難を救うことができた。国主は若者の口から、それが老母の智慧であることを知り、老人の尊ぶべきを悟つてさっそく棄老の掟を廃するに到つたという。」

(4) 『日本昔噺』全二十四冊の内容は次の通りである。

(発売元・博文館)

(第一編) 桃太郎、(第二編) 玉の井、(第三編) 猿蟹合戦、(第四編) 松山鏡、(第五編) 花咲爺、(第六編) 大江山、(第七編) 舌切雀、(第八編) 俵藤太、(第九編) かちく山、(第十編) 瘤取り、(第十一編) 物臭太郎、(第十二編) 文福茶釜、(第十三編) 八頭の大蛇、(第十四編) 兎と鰐、(第十五編) 羅生門、(第十六編) 猿と海月、(第十七編) 安達ヶ原、(第十八編) 浦島太郎、(第十九編) 一寸法師、(第二十編) 金太郎、(第二十一編) 雲雀山、(第二十二編) 猫の草子、(第二十三編) 牛若丸、(第二十四編) 鼠の嫁入。

(5) 関敬吾『日本昔話大成9・笑話2』(昭和五四年一〇月二〇日・角川書店)二五一ページ。

(6) 注(5)と同書の二六〇ページ。

(7) 東洋文庫『日本お伽集2』(昭和四八年五月二二日・平凡社)の「付録」(原版卷末「解説」)の「姨捨山」(三四三ページ)による。

(8) 『朝日新聞』(昭和五三年五月二二日付夕刊)「文化欄」

— 本学教授 —